

緊急レポート

ラテンアメリカでの新型コロナウイルス禍

2019年の12月頃に中国の武漢（Wuhan）から拡大が始まったとされる新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、東アジア、イタリア等欧州・中東に伝搬し、その後米国やラテンアメリカ・カリブ（中南米）地域へと拡大した。現在はブラジルをはじめとする中南米が世界の新規感染者数増大の一大中心地域と危惧されている。この世界的なパンデミック状況に鑑み、急遽中南米での概況を取り纏めることとしたが、まだ一向に収束の気配はなく、あくまで現時点でのレポートである。

ラテンアメリカ・カリブにおける新型コロナウイルスの感染拡大状況

桑山 幹夫

はじめに

ラテンアメリカ・カリブ（中南米）地域で2020年5月から新型コロナウイルス感染が爆発している。本稿執筆時点（7月4日）で、地域全体で約282万人の感染者、約13万人の死亡者が確認されている。世界の感染者数（累計）および死亡者数（累計）に中南米が占める割合がそれぞれ25%と24%まで上昇し、世界の感染爆発の中心となっている。二大経済国であるブラジルとメキシコだけでなく、疫病対策が功を奏して感染拡大が収まりつつあると思われていたチリ、ペルー、コロンビアでも感染者が急増している。ボリビア、ホンジュラス、グアテマラ、ハイチ、ニカラグア、ベネズエラも増加傾向にある。その一方で、ジャマイカ、キューバ、ウルグアイ、パラグアイのように、収束に向かいつつあるかのような国もある。カリブの島嶼国の中には、感染者は少ないが死亡者が相対的に多く、致死率（感染者数に対する死亡者数比率）が高い国が幾つかある（表を参照）。地域の感染状況は、総括的にはブラジルの動向に左右されるところが大きい。後述のように域内での感染ダイナミズムは一様ではない。地域全体としてはピークに達するのは少なくとも2か月先になるかもしれない。

各国の状況

域内で最多の感染症例がでているブラジルで、7月4日現在で154万人の感染者と6万3,000人の死亡者が確認された。6月下旬には1日で3万人超の感染者および1,000人超の死亡者数がでている。人口

表：中南米（33か国）における新型コロナウイルスの感染拡大状況
（2020年7月4日現在）

国名	感染者数 (人)	死亡者数 (人)	回復・ 退院者数 (人)	致死率 (%)	百万人 当たり 死亡者(人)
ブラジル	1,539,081	63,174	984,615	4.1	297
ペルー	299,080	10,412	189,621	3.5	310
チリ	291,847	6,192	257,451	2.1	317
メキシコ	252,165	30,366	195,724	12.0	231
コロンビア	109,793	4,001	45,409	3.6	74
アルゼンチン	75,376	1,481	25,930	2.0	32
エクアドル	61,535	4,769	28,507	7.8	266
パナマ	36,983	720	17,761	1.9	162
ボリビア	36,818	1,320	10,766	3.6	113
ドミニカ共和国	36,184	786	18,602	2.2	71
グアテマラ	22,501	920	3,330	4.1	49
ホンジュラス	22,116	605	2,250	2.7	61
エルサルバドル	7,507	210	4,434	2.8	32
ベネズエラ	6,537	59	2,100	0.9	2
ハイチ	6,230	110	1,286	1.8	10
コスタリカ	4,621	18	1,721	0.4	4
ニカラグア	2,519	83	1,238	3.3	13
パラグアイ	2,385	20	1,134	0.8	3
キューバ	2,369	86	2,227	3.6	8
ウルグアイ	955	28	840	2.9	8
ジャマイカ	721	10	565	1.4	3
スリナム	565	14	276	2.5	22
ガイアナ	272	14	120	5.1	18
トリニダード・トバゴ	130	8	115	6.2	6
バハマ	104	11	89	10.6	28
バルバドス	97	7	90	7.2	24
アンティグア・バーブーダ	68	3	23	4.4	31
ベリーズ	30	2	19	6.7	5
セントビンセント・グレナディーン諸島	29	0	29	0.0	0
グレナダ	23	0	23	0.0	0
セントルシア	22	0	19	0.0	0
ドミニカ	18	0	18	0.0	0
セントクリスファー・ネイビス	16	0	15	0.0	0
中南米(33か国)合計	2,818,697	125,429	1,796,347	4.4	196

注：致死率（感染者数に対する死亡者数比率）

出所：米ジョンズ・ホプキンス大学のデータおよび Our World in Data, Coronavirus (COVID-19) Testing のデータに基づいて、執筆者作成

比でも感染者数が多く、百万人当たり 297 人の死亡者数になる。感染の中心がサンパウロ市などの大都市から医療施設が脆弱な地方の貧困地域に移動している。中央政府の対策は感染者が公式に確認されてから 5 か月経った現在でも一貫性を欠いている。家計を支えるために職場復帰せざるを得ない社会的弱者が多いため、隔離対策や事業閉鎖を奨励してきた州政府の防疫策とは相反しつつも経済活動の段階的な再開を目指している。

ブラジルに次いで感染者が多いペルーでは、感染者は 30 万人、死亡者は 1 万人を越えた。感染者は急増するものの厳格な封じ込め措置が早くから講じられ、チリと並んで域内で人口当たり最多の PCR 等の検査が実施されてきたこともあって、ペルーでは致死率は 3.5% と比較的 low 値で推移している。だが、インフォーマル経済への依存度が高く、毎日のように市場に買い物に行く習慣、公共交通機関を利用する移動手段などの社会的要因が重なって、防疫対策の成果は期待されたほど出ていない。感染者の急増で在宅待機措置が数回にわたり延長されてきた。

PCR 検査を幅広く行って早期に感染者を見つけ出して隔離する措置をとり、低い致死率（7 月 4 日現在、2.1%）を維持してきたチリでも、6 月に入って感染爆発が起こっている。感染者数に約 3 万 6,000 人の集計漏れが見つかったことから、累計数は 25 万人に跳ね上がった。死亡者数も 3 週間足らずで 3,500 人増えた。かくして、感染者の 80% 超が集中するサンチャゴ首都圏だけでなく、地方都市でも外出禁止措置が課せられるようになった。PCR 検査で感染者を早期に見つけだす第 1 段階は成功したが、感染経路の追跡や感染患者の隔離・治療の段階で政府の対応が後手に回っている。PCR 検査の陽性率が徐々に低下していることから、ウイルス拡散が終息に向かっていると楽観的な観測もある。

メキシコでは 6 月に入って新規感染者数と 1 日の死亡者数が急増している。致死率が 12.0% と高く、検査数が限られているため、実際の感染者数が過少報告されている可能性もある。医療体制の崩壊を防ぐには、中央政府の主導力と民間機関との連携強化が不可欠となる。ブラジルと同様、防疫対策が遅れて感染爆発が起こり、州政府との軋轢もあって中央

政府の求心力が低下するなか、まずは商業活動の規制を緩和して社会不安を払拭したい。

メキシコに次いで感染者が多いコロンビアでも感染が拡大している。6 月 26 日にはそれまで最多の新規感染者（3,486 人）と死亡者（163 人）が確認された。封じ込め政策が功を奏してか、百万人当たりの死亡者数（74 人）はブラジル、チリ、ペルーやメキシコと比べて低い。一方でエクアドルでは感染爆発が 5 月上旬に起こり、6 月には収まりつつあったが、7 月に入って感染が再び拡大している。集計漏れの感染者数が多く、検査数が少ないこともあって、実際の死亡者数は公式発表数よりも遥かに多いと推測される。

厳しい防疫措置をとってきたアルゼンチンでも 6 月に感染者が急増しており、外出制限措置が 7 月中旬まで延長された。ドミニカ共和国やボリビアでは 5 月中旬から感染者が増えてはいるが、1 日の死亡者数が抑えられており、致死率は低い水準で推移している。パナマの場合は、6 月から感染者が急増しており、人口百万人当たりの死亡者数が 162 人と比較的高い。またウルグアイのように、都市封鎖などの厳しい対策を取らずに外出禁止措置を軸とする感染防止対策しか講じてこなかったにもかかわらず、感染のスピードが減速してきている国もある。

中米 5 か国に関しても、国によってかなりの差がみられる。早期に国境封鎖に踏み切ったエルサルバドルでは 6 月から感染者が急増しているが、致死率は 2.8% に抑えられている。グアテマラでは新規感染者が急増し、致死率も上昇基調にある。ホンジュラスでは、6 月に入って新規感染者が急増しているが、死亡者が比較的少ないため致死率は 2.7% に抑えられている。また国際的に評価される医療システムを持ち、厳しい水際対策をとってきたコスタリカでは、致死率が 0.4% と中南米諸国のなかでも低い値で推移していたが、6 月中旬から新規感染者が急増している。コスタリカと国境を接し、防疫対策が緩いと言われるニカラグアは 6 月に入って検査数を増やしたが、7 月 4 日の時点で 2,519 人の感染者、83 人の死亡者が報告されており、致死率（3.3%）はその他の中米諸国と似たレベルで推移している。

結論に代えての附言

中南米では社会・経済的活動の再開に向けて、「社会的距離」措置に基づいて段階的に経済の再開へと移行し始めている国がでてきている。しかし現状に鑑みると、そのような緩和政策は時期尚早だと考えられる国が幾つかある。防疫対策の緩和と経済再開のタイミングを誤ると、パンデミックが長引く危険性が高まり、医療体制だけでなく経済の崩壊に繋がる可能性がある。経済再開に向けて、社会的に脆弱な国民に過大な犠牲とリスクを負わせることなく、封じ込め対策が遵守されなければならないが、そのためには包括的な経済的支援措置が不可欠となる。外出禁止措置、職場閉鎖や休業命令などの隔離対策から、社会的距離のような柔軟な措置に移行する時期の判断は、PCR検査数の増加および濃厚接触者の追跡能力、さらには感染患者を受け入れられる病院数とICU病床数、および人工呼吸器などの機器の利用可能性によっても変わってくる。医療環境が整っていないければ、感染拡大を封じ込めることは難しい。

早急に環境を整備して、第2波、第3波に備えるべきだと考える。

(本稿は、2020年7月4日時点での収集データ・資料に拠っている。)

(くわやま みきお 神戸大学経済経営研究所リサーチ・フェロー、ラテンアメリカカリブ研究所・シニア研究員)

ラテンアメリカ参考図書案内



『ブラジル・カルチャー図鑑 改訂版 ーファッションから食文化までをめぐる旅』

麻生 雅人・山本 綾子 スペースシャワーネットワーク
2019年12月 176頁 1,800円+税

『ラテンアメリカ時報』2012/13年冬号で紹介した『ブラジル・カルチャー図鑑』(同じ編著者、出版社から2012年刊)の改訂版。ブラジルの魅力的なカルチャー全般を、ファッション、アート・民芸品、建築・都市、食・飲み物、祭り・踊り・音楽編に、サンパウロ、リオデジャネイロ、フォルタレーザ、クリチバ、ベレンの5都市のライフスタイルの構成だった前版からワールドカップ2014特集などを削除し、改訂版では新たに「一生に一度は行きたいブラジルの絶景」でイグアスの滝、白い大砂丘のレンソイス、アマゾン、パンタナールの大湿原をはじめシャパーダ・ジアマンチーナ、最も美しい島フェルナンド・デ・ノローニャなどの大自然をまとめた観光情報や、「日本で出会えるブラジル」をテーマに輸入グッズや食材、日本にあるブラジル店や入手できるブランド情報、北東部のカップインドウラード(黄金の草)を使ったジェリー、リオ発のバッグジルソン・マルチンス、人気の下着やスポーツウェアブランドのホープ、南米最大の化粧品ブランドのボチカリオ、サンパウロ生まれで日本でも8店舗を展開するシュラスコの名店バルバッコア、ブラジル家庭料理食品のネット販売サウデ・エ・サポール、チョコレートやスナック菓子、パルミット(椰子の新芽)、カシャッサ(ピンガ)などを購入出来るお店のリストを新たに加えた。

写真・図版を600点以上掲載し、ブラジルへの旅行、滞在の案内書としてはもちろん、日本にいてブラジルを楽しむためにも有用かつ楽しい図鑑。 (桜井 敏浩)

(本書は一般書店では扱っておらず、一般社団法人日本ブラジル中央協会が受託販売を行っている。購入申し込み、問い合わせは <https://nipo-brasil.org/archives/6348/>)